

きつと左利きでAB型で2月29日生まれな君へ

筑紫女学園高校 3年 中富 花楓

「僕はチョコレートが嫌いです」

あまりにも爽やかに言い切ったその言葉に私は凍りついた。朝のホームルーム中、転校生の小川君が教卓の側で満足気に笑みを浮かべていた。チョコレートが嫌いだなんて言わなければバレンタインには鞆から溢れるほどのチョコレートを貰えそうな美しい容姿をしていた。肌が驚くほど白くて、鼻が高く、髪まで真っ白で、目はキヤラメル色だった。少し個性的な青い腕時計を付けていて、それさえも妙に似合っていた。窓の外にはまとわりつくような夏が広がっているというのに、小川君のまわりだけは涼しそうに見えた。無意識のうちに握りしめていた右手にじんわりと汗が滲んだ。

私が生まれ育ったこの町はチョコレートで有名だ。誰もがチョコレートが好きで、小学校の頃、給食では毎日のように小さく包まれたチョコレートが出た。そのチョコレートを誰にも見つからないようにこっそりポケットやランドセルの奥にしまうのが私の毎日の試練だった。

「私はチョコレートが嫌いです」そう言うことが出来たらどれだけ良かったか。でもそんなこと言えるわけがなかった。雨で濡れたグラウンドが乾くのが待ちきれずに、泥まみれになりながら走り回る鬼ごっこがあんまり好きじゃないことも、みんなが嫌いだという算数が少し好きなことも、言えるわけがなかった。

「今日たしかお誕生日だったよね？これあげるー！」

私が誕生日だった夏の日、同じ班で給食を食べていた友達はどうやって私の右の手のひらに包みを剥がしたチョコレートをのせてくれた。ありがとう、なんて言いながら頭はパニックだった。包みを剥がされたチョコレートを持って帰る手段が思い付かなかったからだ。その日履いていたスカートはポケットが付いていなかったし、ランドセルに包まれていないチョコレートを入れるのはさすがに億劫だった。焦れば焦るほど手のひらのチョコレートがじつとりと溶けていくのがわかった。私はチョコレートののった手のひらをそのままぎゅっと握りしめた。右手にチョコレートを隠したまま一日の残りをやり過ぎそうと思ったのだ。案の定、午後の算数の授業は左手じゃまともにノートを取ることにすら出来なかった。それが無性に悔しかった。

あの日の帰り道はジリジリと照りつける太陽が、チョコレートが嫌いなことを隠している自分に詰め寄ってくるようだった。何事も少数派になることが怖くて、周囲の視線ばかり気にする私に太陽は疑いの眼差しを向けた。私はおもむろに手をひらいた。べつとりとチョコレートがついている。泥みたいだと思った。そうだ、泥にしまえばいい。私は着ていた服に手のひらのチョコレートをなすりつけた。チョコレートを握りしめて歩く惨めさよりも、鬼ごっこで泥塗れになった設定の方

が何倍もマシな気がした。汚れた服を見たらお母さんは怒るかもしれないと思ったけれど、帰ってきた私の姿をみたお母さんは一瞬驚いた顔をして、むしろ嬉しそうに私に着替えを促した。きつと私が珍しく泥塗れになるまで遊んできたと思ってる喜んでくれていたのだと思う。それが余計に悲しかった。

少し離れた席で小川君は既に大勢のクラスメイトに机を囲まれていた。白い髪をサラサラと揺らして笑っている。このクラスに白い髪の人なんて他にいないし、あんなに肌が白い人もいない。目がキヤラメル色の人だっていない。チヨコレートを嫌いな人だっていない。小川君は少数派だ。

そしてこのクラスには鬼ごっこが好きじゃない人も、算数が好きだった人もきつといない。チヨコレートが嫌いな人だっていない。やっぱり私は少数派だ。

でもどうしてだろう。同じチヨコレート嫌い、同じ少数派なのに、小川君と私じゃ全然違う。私のチヨコレート嫌いがマイノリティなら、小川君のチヨコレート嫌い、特別な容姿はレアリティみただ。

私は右利きだし、A型だし、ありふれた夏の日生まれで、そういうところは平凡で、それなのにチヨコレートを好きにはなれない。だけどきつと小川君は左利きで、AB型で、2月29日生まれに違いない。全てが珍しくてかっこいいんだ、きつと。

ホームルームが終わると数学の授業が始まった。

「では、この値は正の数と負の数のどちらになるでしょう？」

先生が問いかける。負の数だ、と私は思った。

「正の数だと思う人」

先生が聞くとクラスの大半が手を挙げる。一気に自分の答えに自信がなくなる。

「負の数だと思う人」

行方を失った右手で誤魔化すように前髪を触る。そのとき、視線の先で青い腕時計を付けた腕がすつと伸びるのが見えた。小川君だ。青い腕時計を追いかけられるように、気付いたら私の右腕も伸びていた。今、怖くて仕方ない少数派に立っている。

「そう、答えは負の数です」

先生が言うと、小川君は転校初日なのに周りのクラスメイトに誇らしげな顔をした。チヨコレートが嫌いなくせに小川君はチヨコレートのようにあつという間に溶けてクラスに馴染んでいく。まるで窓の外で輝く太陽が小川君をテンパリングしているみたいだ。

先生の解説が始まると小川君はすぐにシャーペンを握り、ノートを取り始める。シャーペンを握る手は、右だった。なんだ、右利きか。それでも相変わらず小川君の白い髪は涼しげに揺れている。

たとえ君が右利きでも、やっぱり君は左利きでAB型で2月29日生まれなんだ。